

釉薬

たとえば、旅というのは、まっすぐに移動することのよう
うでいて、どこかに少しだけ停滞する時間のことを言うの
かもしれない。ある冬の日の午前十時、無音の駅のベン
チ。静かに置いてあるマフラーの上に座りながら、私はひ
とりで煎茶を飲んでいた。陽はまっすぐに降りてきて、赤
く焼けた瓦屋根の上に溜まっていた。

誰とも約束していない、という自由の輪郭が、陶器市の
チラシの角に小さく折れ目を作っていた。道に迷うような
土地でもなかったが、駅前の小さな地図には「やきもの散
歩道」と書いてあって、そこだけ時代が滲んでいた。私は
特に何も散歩しなかった。ただ、古びた製陶所の前にあっ
た細い路地に入り込んで、小さな木の箱に入れられた「使
い込まれた器たち 100円」の棚を眺めた。指先でひと
つ、ふたつ、音を鳴らした。磁器と陶器の違いについて考
える。熱を閉じ込めるものと、逃がすもの。私は、どちら
にもなりきれなかった日々を思い出す。

店の軒先で、番茶を紙コップで出してくれた老婆がい
た。私は「ありがとう」と言い、彼女は「遠くから？」と
聞いた。どこが遠いのかは、いつも曖昧だった。私の距離
感と他人の距離感は、たぶん一度も一致したことがない。
番茶はうすくて、苦くなくて、時間が戻るような味がし
た。「読むことは好き？」老婆が急にそう言った。頷く

と「私は最近、辞書ばかりめくってる」と笑った。「意味を知ってる言葉の、知らなかった読み方が好き」とも言っていた。意味より、読み方。あるいは発音より、温度。お茶も、読むことも、それくらいでちょうどいいのかもしれない。

夕方、私は少し迷ったふりをして、ひとつの湯呑を選んだ。縁がかすかに欠けていて、釉薬のかかりが甘い、やさしい白の陶器だった。包んでもらった紙袋の持ち手をぐるぐる指に巻きながら、坂を上った。特に目的地もなく、ただ風景と並行に歩いていた。物語のように結末のない午後だった。遠くで犬の吠える音がして、煙突の影が細く伸びていた。

私がどこかへ行く理由はいつも、何もないことに耐えられなくなるからだ。読めるけど読まない本、淹れられるけど淹れない茶、語れるけど語らない記憶。それらの沈黙が、日常の部屋に溜まりすぎると、急に呼吸が重くなる。そういうとき、旅は一種の換気になる。ゆく先々の空気は、ゆるやかに湿っていて、正しいとは言えないけれど、無理のない方向へ私を押し返してくれた。

帰りの電車で、私は買った湯呑を取り出して、袋の中で何度も手の中に収めてみた。指のかたちに吸いくような、少しだけ不安定な丸み。使いにくいけれど、たぶん、使い続けてしまう器。そういう人がある。そういう文章がある。そういう暮らしがある。何かが「ちょっとだけ違

う」ことで、長く残っていく。完璧なものより、ほんの少し不自由なものの方が、人の手を離れにくい。

私はそういうものの中で、生きていきたいと思った。生きていく、と大きく構えるより、ただ残っていたい。読まれずに残った辞書の折り目や、湯呑の底にうつすら溜まった静かな茶の色。そういうものに、名前を与えず、語らず、ただそばに置いておく。そんなふうに、旅も、読むことも、器も、お茶も、少しずつ体内に降ってきて、骨のかわたちを変えていく。